増大・強調の擬似接頭辞をもつドイツ語の名詞（2）

渡　辺　有　而

前稿[1]において筆者は，擬似接頭辞の研究史を概観して批判を加えた後，名詞に由来して増大・強調を表す74種の擬似接頭辞を6グループに分類し，その(1)と(2)について実例に即しつつ論述した．本稿の冒頭に，改めて従来の理論のうちの主なものをごく簡単に紹介し，概念規定を行うことにする．

ブスマン（H. Bußmaun）の『言語学辞典』[2]（1983年）は，擬似接辞（Affixoid）を「自由造語要素から固定造語要素へと発展しつつある，接辞に似たすべての語の上位概念」，擬似接頭辞（Präfixoid, Halbpräfix）を「自由に現れる要素と意味上同系で，連続的に現れる接頭辞的造語要素」と規定している．また擬似接尾辞（Suffixoid, Halbsuffix）に関する次の説明は，そのまま擬似接頭辞にも当てはまる．「(連続性と意味上の同系性とをもつと同時に）元の語の内容価（Inhaltswert）から一般化の方向へと明らかに離脱している．接尾辞と擬似接尾辞との境界は流動的だ．明白な合成語では第2要素が意味論的・文法的に適切にパラフレイズされ(strahlengeschützte Flugzeuge（下線筆者，以下同様）=Flugzeuge, die vor Strahlen geschützt sind), 真の接尾辞（=語としての性格のない要素）ではパラフレイズが不可能であるのに対して，擬似接尾辞[3]はパラフレイズ形成に使われはするが，それから外れた表現に至る．これは擬

似接尾辞がまだ自意的（autosemantisch）な性格を有しているからだ.」

フライシャー（W. Fleischer）は『現代ドイツ語の造語』[4]（1969年）において，プラーク学派が提示した「言語的カテゴリーまたは単位の，中心と周辺との関係」を重視し，ダネシュ（F. Daneš）の論文を引用している．即ち，「要素の類（クラス）（及び下位類（サブクラス））は，境界がはっきりした<箱>ではなく，緊密な核（中心）をもち徐々に推移して広がった，周辺へ至るフォーメーションと見なすべきだ．そして周辺は更に，次のカテゴリーの周辺地域へと移行(浸透)する.」[5] このような移行の例としてフライシャーは，Arbeitsstätte, Schulwesen, wertvoll, kugelförmig などを示し，「これらの要素のうちの一定のものは，いつもこの移行領域に属しているのではなくて，徐々に完全な接尾辞の状態に達する．そのためここでは同音異義の概念を用いて研究しなければならない」[6] と論じている．1983年の改訂版の 2.4.5. 節には，「接頭辞 Haupt-, Grund- 及びその他の増大・強調（Steigerung und Verstärkung）の接頭辞」というタイトルがつけられ，「擬似接頭辞」という術語は使われていない．総論に当たる「原則と根本概念」の章では，mitarbeiten, -bringen, -fahren などにおける mit- は，bei- と比べて前置詞との差異が小さいとして，「このような場合には<擬似接頭辞>という術語を使って作業できるだろう」[7] と述べているにも拘らず，各論ではこの術語を殆ど用いていないのは，不徹底且つ前後撞着と言わざるを得ない．

さてフライシャーはこの節において，先ず「或る概念の強調（Hervorhebung）を表すのに今日非常に生産的で，erz- や ur- ほど感情的（emotional）ではなく，幾つかの同種のものの中から最も重要なものを取り出す」Haupt- を挙げ，次に「或る事物の根底にある本質的なものを強調し」，部分的には Haupt- と同義的に使われる Grund- を挙げて，両者の分布状態の異同を実証する．また彼は強い感情的な副次的価値（Beiwert）を

もつ名詞（筆者注：下線部）を用いて達せられる別の種願の増大・強調」の例として，Blitzkerl（利口な奴），Atombusen（豊かな胸），Affen-/Bullenhitze（酷暑），Höllenlärm（ひどい騒音），Heidenangst（ひどい不安），Mordsspaß（凄い冗談），Riesenstadt（巨大都市）を列挙する．これらの語の大半は感情の激しい動きを表し，主として俗語的な砕けた言語層で使用されるが，Haupt-, Grund-, Spitzen- にはこのような形象性がなく，感情の動きを強調する機能に欠ける，と彼は指摘している．

次にエルベン（J. Erben）の『ドイツ語造語論入門』[8]（1975）では，基礎名詞の修飾（Modifikation）には，縮小・増大・否定・評価・性別・集合・共同の7種類があるとし，「増大」の「付加的な意味特性」は「非常に大きい・巨大・最高・最重要」などで，その「最も重要な機能の担い手」（形成形態素：Fomans）の中に「Blitz-, Riesen-, Spitzen-, Haupt- のような擬似接頭辞」[9]を数えている．彼は，俗語やジャーナリズム用語に最初に現れることが多い擬似接頭辞として，このほかに Affen-, Bomben-, Grund-, Heiden-, Höllen-, Mords-, Pfunds- を挙げているが，奇妙なことに以上11種の造語例は全く示していない．また「修飾」の一覧表には，「増大」の欄にある前述の4種以外の擬似接尾辞は載っていない．所属不明の扱いを受けた7種は，感情的強調の機能をもつところから「評価」に属するべきだが，その下位区分は更に不十分である．即ち a）誤り（Fehl-, Miß-, After-), b）代理（Vize-), c）以前（Alt-, Ex-), d）特別・追加（Extra-, Sonder-）の僅か4区分しかなく，当然設けるべき「強調」（「付加的な意味上の特徴」：bombig, höllisch, mordsmäßig, pfundig など）がない．「比較」という重要な下位区分が欠けているのも，エルベンの分類のもう一つの短所だろう．Traum-, Blitz-, Kern-, Engels-, Glanz-, Mammut-, Monster-, Sau-, Schwein-, Hunde-/Hunds- 等々，及び筆者が前稿で第3グループ（汚物・騒音・つまらぬ物などを表す語に由来する）としてま

とめた擬似接頭辞（Scheiß-, Drecks-, Mist-, Lumpen- など）は，「増大」「強調」と共に「比較」の意味をもつ語を形成している．一般に合成名詞の規定語が擬似接頭辞へ移行する初期の段階は，「比較」であることが多い，例えば20世紀初頭のカンペの辞典は，Höllenpein を „Pein in der Hölle, wie in der Hölle, fürchterliche Pein“ と説明しており，「地獄での苦しみ」「地獄にいるような苦しみ」「ひどい苦しみ」という3段階の意味変化を示している．

マンハイム・ドイツ語研究所（IDS）の『ドイツ語の造語 —— 現代語におけるタイプと傾向』の『名詞篇』[10]（1975年）の著者ヴェルマン（H. Wellmann）は，名詞に由来し他の名詞と結合する擬似接頭辞として Affen-（13語），Blitz-（15），Bomben-（21），Heiden-（12），Höllen-（14），Mord(s)-（39），Pfunds-（8），Riesen-（84），Spitzen-（16）；Grund-（71），Haupt-（206）の11種・499語を挙げた後，Atom-, Bären-, Bullen-, Mammut-, Sau-, Teufels- の6種を，「造語方法が体系的に発達してはいないが，規定語の内容からだけでは説明できない増大機能」をもつ，合成名詞の第1要素と呼んでいる．

「意味論的修飾」のモデルによる造語公式は増大辞の場合次の通りである．

J=f(v, x)	x=BS　v∈{sehr groß, riesig...}
「増大的」パラディグマからの形態素を用いた名詞形成（Riesenerfolg）	

この公式は，名詞形成の「変形値」(transformationeller Wert) J が，基礎名詞 x (BS) と，変形によって確定される限定詞 v との関数であることを示す．例示された Riesenerfolg は，v=riesig と x=Erfolg との関数として説明される．

ヴェルマン自身が認めているように，話し言葉に於て旺盛な造語力を発

揮している「接頭辞のような形態素」は，あまり取り上げられていない．

IDS の 3 部作（動詞篇・名詞篇・形容詞篇）を補完するために1984年に刊行された，ゲルスバッハ／グラーフ（B. Gersbach/R. Graf）の『話し言葉に於ける造語』[11]は，ルーオフ（A. Ruoff）の『話し言葉頻度辞典』[12]に基づいている．その第 1 巻『名詞篇』は，「名詞の合成」(170 ページ）と「名詞の派生」(140ページ)の 2 部に分けられている．このことが既に，筆者たちが合成・派生という伝統的な 2 分法に未だに囚れていることを示している[13]．このため擬似接辞による造語は，「合成の一部分として僅か 2 ページ半で片付けられ[14]，例示された 36 種・159 語の中には，Vizefeldwebel のような接頭辞付きの語や，Abschlußzeugnis, Atombombe, Hilfsarbeiter, Tafelobst のような合成語が多数混じっている．増大・強調の機能をもつものとしては，Grund-,（4 語），Haupt-(48)，Heiden-(2), Lumpen- (1), Mords- (10), Pfunds- (1), Riesen- (5), Sau- (4), Scheiß- (4) の計 9 種・79語が見られるに過ぎない．

とはいえ筆者たちも，現下の研究状況には理解を示し，「(合成と派生との間の）移行は，言語史的に一定の――そして常に同一の――方向，即ち独立した語彙素から固定した状態でしか現れない形態素へという方向を取る」ことを確認している．

これに対し，ステパノヴァ／フライシャー（M. D. Stepanowa/W. Fleischer）の『ドイツ語の造語の根本的特徴』[15]（1985年）は，前述のフライシャーの『現代ドイツ語の造語』(1969年）と同じく，プラーク学派の「中心 vs 周辺」の対立概念に基づき，「派生語及び接頭辞付きの語（それと共に造語接辞）と合成語（それと共に合成要素）との境界は，中心から周辺への段階によって特色付けられている」[16] として，接辞を 3 グループに分ける．I は接辞的性格が最も明らかなもの，即ち完全な接頭辞である．

Ⅲはその対極にあって，その内部では連続的造語能力も意味も様々で，大半の語は「日常語的」または「崩れた表現」(salopp) という用法上の限定がある．

Ⅰ．Erzrevanchist, Gestühl, miß-, un-, ur-,[17]

Ⅱ．Allerweltsgesicht（平凡な顔），Grundfehler, Hauptaufgabe, Heidenrespekt（非常な尊敬），Spitzenleistung, Traumberuf usw.

Ⅲ．Affenschande（大恥），Blitzkerl, Bullenhitze（筆者注：共に既出）Drecksarbeit（汚い／低級で不快な仕事），Engelsgeduld（広大無辺な寛容），Glanzrolle（華やかな役），Hundekälte（酷寒），Kerngedanke（中心思想），Höllenkrach（大騒ぎ），Mammutbetrieb（マンモス企業），Rekordtiefstand（記録的不況），Schweinegeld（莫大な金），Schwerpunktproblem（重点的な問題）usw.

ⅡとⅢが，広い意味での接頭辞による造語法の周辺部を形成し，様々のニュアンスをもつ増大辞（Augmentativ）もここに属する．

ステパノヴァ／フライシャーは，ソヴィエトにおけるゲルマニスティクの習慣に従って，擬似接辞を半接辞（Halbaffix）と呼び，次の4項目を以て，造語要素を「半接辞」に組み入れるための基準としている[18]．

1）自由に機能する語の語幹（より稀に：語形）と必ず形式的に一致すること．

2）自由に機能する語の語幹と語源的に結び付いていること．これによって，類縁関係のない語幹と音韻上偶然に一致としているというケースが除外される．

3）多少ともはっきりした連続的な造語をすること．即ち1語だけではなく，幾つかの（時には非常に多くの）語において用いられていること．

4）多少の意味上の変化があっても，自由に機能する語の語幹との間に意味上の類似性があること．

以上概観したように，擬似接辞の定義については，本稿に引用した諸説は大筋に於て一致している．特にステパノヴァ／フライシャーが規準とする4項目は最も包括的なので，筆者は前稿及び本稿を含む，擬似接辞をもつ名詞・形容詞に関する体系的論述に於て，概ねこの基準に立脚する．一方，増大・強調の概念については共通する見解が乏しい観があり，概念規定の不十分な論考も少くない．その中で出色と言えるのはフライシャー（1969年）で，Haupt-, Grund-, Spitzen- と，「感情的な副次的価値」をもつ Affen-, Höllen-, Heiden- などとを対比している．筆者は Haupt- などを16種に拡大して第1グループ（主要・根本・中心・最高・理想・急速・豪華・卓越などを表す語に由来する擬似接頭辞）としてまとめ，Affen-, Höllen- その他を第2—第6グループに分類した．第2グループ以下の擬似接頭辞による造語は，第1グループのそれと比較して，日常語・俗語の言語層に属するものが多いばかりでなく，基礎名詞自体が既に俗語であり「感情的な副次的価値」を備えているものがかなり多い．第1グループと第2グループ以下のいずれに対してもフライシャーは命名していないが，筆者は前者を「増大」，後者を「強調」と呼んで，区別を明確にしておきたい．

表1　増大・強調の擬似接頭辞の分布と造語力　　82種・1557語

(1)　主要・根本・中心・最高・理想・急速・豪華・卓越などを表す語に由来するもの．　16種・716語（46.0%）：　*Haupt- 340（21.8%），*Grund- 130（8.3%），*Spitzen- 48（3.1%），*Traum- 41（2.6%），*Blitz- 27（1.7%），Pracht- 24（1.5%），Kern- 20（1.3%），Wunder- 19（1.2%），Engels- 18（1.2%），Top- 15，*Glanz- 14，*Rekord- 11，Gipfel- 5，Mond- 2，Himmel-，Höhe-，各1．

(2)　生物の名称に由来するもの．26種・367語（23.6%）：　*Riesen- 111（7.1%），*Lieblings- 50（3.2%），*Mammut- 28（1.8%），Laus(e)- 27（1.7%），*Sau- 23（1.5%），*Heiden-，Monster-，Elefanten- 各16

(1.0%), *Hunde-/Hunds- 15, *Affen- 13, *Schwein(e)-/Schweins- 12, Kuh-8, Schafs-7, *Bären- 6, Esel-, Pferd- 各3, Katzen-, Mäuse-/Mäuschen-, Mücken- 各2, Bienen-, Bock-, *Bullen-, Fliegen-, Kater-, Schlangen-, Wolfs- 各1.

(3) 汚物・嘔吐・騒音・ぼろ・つまらぬ物などを表す語に由来するもの. 11種・242語 (15.5%): *Scheiß- 74 (4.8%), *Drecks- 65 (4.2%), Mist- 53 (3.4%), *Lumpen- 18 (1.2%), Knall- 13, Kotz- 9, Schiß-, Fetzen- 各3, Piß- 2, Bums-, Furz- 各1.

(4) 科学・技術用語に由来するもの. 8種・78語 (5.0%): *Bomben- 27 (1.7%), Quadrat- 25 (1.6%), *Atom- 9, *Schwerpunkt- 6, Kanonen-, Kubik- 各4, Kur- 2, Raketen- 1.

(5) 殺人・地獄・悪魔・死(者)・疫病などを表す語に由来するもの. 7種・74語 (4.8%): *Mords- 38 (2.4%), *Höllen- 18 (1.2%), *Teufels- 8, *Toten- 4, Pest- 3, Todes- 2, Leichen- 1.

(6) その他. 14種・80語 (5.1%): *Pfunds- 17 (1.1%), Blut- 13, Feld- Wald- und Wiesen- 11, *Allerwelts- 9, Marathon- 7, Arsch- 6, Bier- 4, Stock- 3, Sack-, Stein-, Wurst-/Wurscht-, Alltags- 各2, Kreuz-, Schnaps- 各1.

表1は,前稿のそれに当たる表を,次の5点において修正したものである.

1. 新たに Pracht-, Wunder-, Lieblings-, Elefanten-, Furz-, Feld- Wald- und Wiesen-, Allerwelts-, Alltags- の8種・132語を加えたこと.

2. Stink- (4語) を抹消したこと. この擬似接頭辞は名詞に由来していないためである.

3. 幾つかの異形がある場合, それらをまとめて1語として数え直したこと. その結果 Laus(e)-を43語から27語に, Hunde-/Hunds-を17語から15語に, Schwein(e)-/Schweins- を13語から12語に, それぞれ改めたこと.

4. Arsch- を(3)から(6)へ，Lumpen- と Fetzem- を(6)か(3)へそれぞれ移したこと．

5. 前稿完成後に見出だした語を加え，また合成語により近いと思われるものを除外したこと．

このような訂正を行った結果，前稿の74種・1,468語は82種・1,557語に拡大された．これまで最も多く擬似接頭辞を挙げたステパノヴァ／フライシャー（1985）ですら23種であり，筆者が前稿で紹介し批判したヘンツェン（1965），フライシャー（1969），エルベン（1975），ヴェルマン（1975），ゲルスバッハ／グラーフ（1984）の諸家が記述したものを加えても，重複するものを除けば僅か29種（表1の＊印）に過ぎないのに比べ，筆者は擬似接頭辞とその造語例との双方で大幅な拡張をなし得たと自負している．しかし前稿でも繰り返し述べたように，擬似接頭辞そのものが，合成語の第1要素から接頭辞への移行領域を形成する，非常に流動的な，時として曖昧な存在である．新聞・雑誌・文字作品などには，今後も続々と新しい擬似接頭辞が現れるであろうし，現在では擬似接頭辞と見なされているものの幾つかは，将来完全に原義を離れ接頭辞化するであろう．従って筆者は表1に対して，今後も拡大・修正を重ねる必要に迫られることだろう．

さて前稿で取り上げた(1)と(2)の両グループに今回新たに加えた Pracht-（26語），Wunder-（19語），Lieblings-（50語）及び Elefanten-（16語）を，先ず扱うことにする．

Pracht-（23語）についてのキュッパーの記述を引用すると，「大抵二重アクセントをもつ語の第1要素として，是認（Anerkennung）を表し，特に巧みさ（Anstelligkeit）・社交性・豊かな特色（Charakterfülle）・美しさなどを表現する．とりわけ1800年以来.」とあり，既に2世紀近く擬似接頭辞的に使われてきたことが分かる．キュッパーはそれぞれの単語のそれぞれの意味・語法について，「ある表現が日常語的な（umgangs-

sprachlich）特色を取るか，或いは日常語によって独自に造られた時点」を丹念に調べて記載しているが，それによれば Pracht- をもつ26語中11語は1800年代から日常語として使用されている．

擬似接頭辞 Pracht- を有する語の意味領域としては，人間が圧倒的に多く，-bengel, -kerl, -mädchen, -mensch, -weib など15語に及び，うち4語は物体の隠喩である．すなわち -exemplar, -knopf（-knopp）[19], -mannsbild[20], -stück[21] がそれに当たる．また人体の部分を表すものが2語（-hüften, -vorbau「豊かな胸」），スポーツ・レジャー関係が4語（-form「優れた能力」，-schuß, -tor：共に「素晴らしいシュート」，-schinken：「豪華本になった価値の低い原稿，芸術性の低いスペクタクル映画」），物体を表すものが2語（上記 -schinken と -schlitten「デラックス・カー」）ある．注目すべき語は Prachtkerl で，キュッパーはこの語の3番めの意味として「良く成長した犬，1870 ff.」を挙げ，「ドッグフード „Chappi" の広告と共に1965年頃新たに広まった」と説明している．つまり動物名称の人間への転用という通常のコースとは逆に．人間名称が動物に転用された比較的珍しい例で，同種のものに，小動物・鳥・魚・虫の雄と雌を表す Männchen, Weibchen などがある．Kerlchen が犬の呼び名に使われたり，Kerl が物を指したり[22]する類の擬人化で，日本語の「奴・そいつ・こいつ」に相当する．ブロックハウス・ヴァーリッヒにおける Prachtkerl の2番目の意味である「特に素晴しく華やかな例（しばしば，はっきりさせるための手の動きと共に）；in dem See habe ich schon solche ～e gefangen…」を，「好漢」と「良く成長した犬」との中間項と見なすことができる．

なおカンペの辞典（1807—1811）には．擬似接頭辞と思われる Pracht- をもつ語はない．Prachttor があるが，「素晴らしいシュート，1920 ff.」ではなく，「豪華な門」という合成語に過ぎない．

次にWunder-（19語）の場合，-doktor, glaube, -heilung, -horn, -täter などは，Wunder- が「奇跡」という原義を保っている合成語であるので，小論の対象にはならない．ドゥーデンに「名詞を伴う合成語の擬似接頭辞的規定語で，基礎語で挙げられているものを情緒的に，想像できないか殆ど想像できないほど良く（gut）素晴らしい（großatig）ものとして特徴付ける．例：Wunderdroge, -mittel, -waffe」と記述されている Wunder- が問題となる．ただし，Wunderland, -welt（不思議な国・世界，素晴らしい国・世界），-tier（不思議な動物・怪獣，（俗）驚異の人・並外れた人），-tat（奇跡，驚くべき／驚異的な行い）と小学館独和大辞典に記載されているような，合成語と擬似接頭辞による造語との二面性をもつ両義語が多く，-kind, -knabe, -mädchen のようにどちらとも取れる語も少なくない．前述の -tier にしても，小学館のように両義語として扱っている辞典には他にクラッペンバッハがあり，クナウルの „eigenartiges, seltsames Wesen“という説明もこれに近い．またヴァーリッヒとドゥーデンは動物の意味，ブロックハウス・ヴァーリッヒ，マッケンゼン及びキュッパーは人間の意味だけを記している．但しヴァーリッヒには，「„sie starren mich an wie ein～“ のような語法でのみ用いられる」という説明があり，Wundertier は人間の比喩としてのみ使われることを示唆している．このように辞書の記述が分かれる原因は，造語法における Wunder- のやや特殊な位置に求められる．即ち合成語の規定語から接頭辞への移行段階を成す擬似接頭辞と規定語との間に形成されるもう一つの移行段階に，Wunder- があるためである．このことから筆者は，従来の造語論における3分法を拡大した4分法（規定語――擬似接頭的規定語――擬似接頭辞――接頭辞）を提唱したい．

一方カンペの辞典には，Wunderbau, -gestalt, -glück, -lied, -nacht, -stück など，擬似接頭辞による造語と見られるものが68語収められている．これは現代の3.6倍に当たり，Wunder- が1800年当時非常に多用された

造語手段であったことを物語る．前稿において筆者は，1800年頃と現在との語数を比較し，Haupt- が127対288，Grund- が29対130，Affen- が１対13であるのに対し，Hunde-/Hunds- の14対17（幾つかの異形を合わせて１語に数えれば13対14）という横ばい現象に注目したが，Wunder-（68対19）は約200年前の28%に落ち込んでいる点で，一層特異な存在である．「不可思議な・驚異的な・素晴らしい」を表す Wunder- の意味機能は，現代では Spitzen-（48語），Traum-（41語），Top-（15語），Glanz-（14語）等々の多彩な擬似接頭辞が，ニュアンスと使用分野との微妙な相違をもって分担している．ここでも Hunde-/Hunds- の項目で述べたように，増大・強調の表現は新鮮さを求める傾向が強く，新旧の擬似接頭辞の間に競合，ひいては新陳代謝が起こり易いことが分かる．カンペが収録し現代の辞典類からは消えた語は，植物（-baum, -gewächs, -kraut, -pflaume, -strauch, -viole）と建築（-bau, -burg, -gebäu, -gebäude, -palast, -grotte ＜人工洞窟＞）のジャンルに最も多く，現在の語彙にあるのは前者では -blume（1800年頃の語彙と共通，以下G）のみで，後者には全くない．同じく容姿（-gesicht, -gestalt, -schönheit），音楽（-lied, -sang, -stimme）に関する語も今では Wunder- を取らず，力・効果を表す語（-kraft, -macht, -stärke, -wirkung）のうち現存するのは，-kraft だけである．Wunder- という古風な擬似接頭辞が現代でも比較的多用されるのは，人間（-kind, -knabe, -mädchen, -tier（前述），-schabe[23]）と医療（-droge, -kur, -mittel, -quelle）の分野である．

次に(2)の「生物の名称に由来するもの」に新たに加えた Lieblings-（50語）についてドゥーデンは，「合成語において，特に好まれる人物・対象物・場所・抽象概念を表すために(用いられる)．これらの人物などは，人がそれに対して個人的関係があり，それらと比較し得るものが幾つかあるようなものであること」と記述している．本来「お気に入り・寵児」の

意味であるだけに，最も多く用いられるのは人間（-bruder, -schüler, -sohn など16語）で，次いで文学(-gedicht, -geschichte など6語)，衣類（-kleidung, -pullover など5語)，飲食（-getränk, -speise など4語)，音楽（-lied, -schallplatte など4語)，演劇（-schauspieler(in) など4語）が目立つ．大別すれば人間（15語）・芸術（14語，-maler, -photo を含む）・衣食（9語）の3分野に，擬似接頭辞 Lieblings- をもつ50語の76%が収まる．

1800年頃の語数と比べる48対50でほぼ同数である．消失した語には感情・性行を表すもの（-gefühl, -genuß, -laster, -neigung, -sünde, -thorheit, -wunsch の7語）と動物名称（-hund, -lamm, -thier, -vogel の4語)が多く，この両分野で現存するものは -pferd ただ1語である．Wunder-の場合と同様に，造語における意味論的な場が，時代と共に大きく変動していることが読み取れる．

Elefanten-（16語）は「大きい・太った・不格好な」の意味で，体の部分（6語)，植物（4語)，人間・動物（各3語）の4分野にのみ用いられ，類義語の Mammut-（16）が巨大な企業・施設・公共企画・レジャー関係の語だけを造り出しているのと全く対照的である．体の部分を表す語は -bein, -finger, -füße, -haxen（足)，-klaue（手)，-stelzen（脚）で，最後の3語の基礎語は，料理用のすね肉，猛獣や猛禽のつめや牛などのひづめ，竹馬をそれぞれ表す語を転用した俗語で，特に Klaue には軽蔑的なニュアンスがある．人間を示す3語も，-baby を除く -küken（子供）と -kalb（女の子）はいずれも動物名称を転用したもので，擬似接頭辞 Elefanten- は Mammut- とは異なって俗語・日常語の言語層に属することが明からである．動物名称は -robbe（ゾウアザラシ)，-schildkröte（ガラパゴスゾウガメ)，-spitzmaus（ハネジネズミ，体長25センチ）で，植物名称は -gras（西アフリカのサヴァンナに生える高さ3～5メートルの草)，-farn

(南アフリカ・オーストリアに生える，幹が木のように太いシダ類)，-apfelbaum, -baum である．後の2種の木は，Der Große Brockhaus などの百科事典に載っている写真から「巨木」と見られるので，ここに加えた．

さて擬似接頭辞付きの造語と判定する規準を，小論の対象として取り上げなかった若干の実例によって示しておきたい．Elefantenbulle, -kuh, -kalb は 象の雄・雌・子供を表す合成語で，-fliege と -laus はいずれも象に寄生することから来る合成語である．-laus はまた象シラミとの形状の類似からカシューナッツも意味する．-füße（大足）は前述のように小論で扱うが，単数形の -fuß（ツルカメソウ）や -fisch（テングギンザメ）は対象外で，形状の類似による動物の隠喩である．後者は口先が長く曲がり易い点で象の鼻を連想させるため，この名がある．

なおカンペの辞典には，擬似接頭辞としての Elefanten をもつと思われる語は見当たらない．南米産の陸上動物 Elefantenschwein は，鼻が象に似ているためで，-ohr（貝の一種）や -kopf（鶏頭の一種）も形の類似による命名である．

さて増大・強調の擬似接頭辞の第3グループは，「汚物・嘔吐・騒音・ぼろ・つまらぬ物」などを表す名詞に由来し，11種・243語（15.7％）に上る語を造っている．しかしこれまでの造語論関係の論文において挙げられたものは11種中3種に過ぎず，例として示された語は僅か6個である．即ち，ゲルスバッハ／グラーフの「話し言葉における造語」(1984) が Lumpenzeit 及び Scheiß- をもつ4語（-angst, -beterei, -kerl, -lohn)，ステパノヴァ／フライシャーの「ドイツ語の造語の根本的特徴」(1985) が Drecksarbeit を，それぞれ挙げているだけである．第1グループ（主要・根本・中心など）は16種中の7種，第2グループ（生物名称に由来）は26種中の10種，第4グループ（科学技術用語に由来）は8種中の3種，第5グループ（殺人・地獄などの語に由来）は7種中の4種が，それぞれ

一度は取り上げられており，第3グループは第6グループ(その他)の14種中2種に次いで，これまで取り上げられることが非常に少なかったタイプである．この種の擬似接頭辞をもつ名詞は，カンペの辞典には Dreckseele ただ1語しかなく，20世紀初頭のハイネの辞典でも Dreckfink, -hammel, -seele の3語にとどまる．現在では，キュッパーの日常語辞典以外の辞典にも収録されている語は，Scheiß-, Drecks-, Mist- が各16，Lumpen- が8，Knall- が5，Kotz- が2，計63語とかなり増加してはいるが，全273語の23%強でしかない．現代語において急速に増大しつつあるこれらの語が，恐らくはその野卑な響きのために語彙の最周辺部に属するものとして，辞典編纂者たちによって，とりわけ造語論研究者たちによって，永く軽視乃至は無視されてきたことは遺憾である．その中にあって，1巻本の小学館独和大辞典が各6巻本のブロックハウス・ヴァーリッヒ及びドゥーデンに拮抗し，時にはこれらを上回るほど，この型の語を収めているのは一大見識と呼ぶほかない．即ち，これら3種の辞典の収録語数は，Scheiß-（全89語）では7対9対4，Dreck(s)-（全66語）では，8対16対12，そして Mist-（全60語）では実に11対8対9である．

さて Scheiß- を伴う語（74語）の意味領域の中では人間が群を抜き，-bulle（おまわり），-fotze（女），-olle（老女，低地ドイツ語），-sack（臆病者），-trommel（太った人），-weib（娼婦）など22語を擁する．人に対する蔑称として多用されることは，本来動物を表す語に Scheiß- を付けたものが4語（-bulle, -fuchs, -hammel, -hund），事物の名称に基づくものが3語（-lappen, -sack, -trommel）あることからも分かる[24]．人間の名称に次ぐのは政治・外交・軍事（-politik, -friede, -Bund, -Barras[25] など6語），仕事（-honorar, -job, maloche[26] など5語），食・住など（-faß, -mampfe[27], -haus など4語）であり，庶民感情が色濃く表れている．ドゥーデンは，「名詞及び形容詞を伴う合成語における擬似接頭辞的規定語

で，粗野で感情的な仕方で反感（Abneigung）・怒りなどを表現する」と述べている．

Dreck(s)-（65語）については，キュッパーのみが，「合成名詞の第1部分として，基礎語を劣等・不快，またはひどいものとして，また勿論汚いものとして特徴付ける」と説明している．これを伴う語の意味論的な場は圧倒的に人間であり，60%に当たる39語を占め，Scheiß- の30%・22語の比ではない．その中でも動物を表す語の転用（-amsel, -bär, -spatz, -watz <猪>など14語）が特に多く，-aas, -luder のように動物の死体を表す語さえある．また -sau は1970年，-schwein は69年に，それを口にした者が名誉毀損罪に問われていずれも300マルクの罰金刑を受けたという，いわくつきの語である．事物名称の人間への転用（-sack, -stück, -ding など5語）のうち -besen は掃除婦のほかに外観の汚い女や堕落した女の意味がある．人体の部分名称の人間への転用も Scheiß-（1語）より多く，-arsch, -loch[28]，それに -maul, -schnauze, -schnute（いずれも「口」の意味から猥談をする人を指す）の5語が見られる．また人名から由来する語（-fritze, -liese, -peter, -suse の4語）も目に付く．仕事・職業に関する6語（-arbeit, geschäft など）のうち -fink と -schmierer は人を中傷するジャナリストを指す．また -blatt はスキャンダルを売り物にする新聞，-wisch[29] はいかがわしい書き物で，ジャーナリズム関係が以上4語ある．

Mist-（54語）をブロックハウス・ヴァーリッヒは，「やっかいだ（lästig）と感じられ，拒否され，立腹されている人間または事物を表す」と説明し，ヴァーリッヒは「劣等・粗悪・非常に不快」と述べている．またキュッパーが擬似接頭辞から発展した不変化の形容詞 mist（例：ein mist Wetter/Mann）を挙げているのは注目に価する．彼によれば1965年以来の連邦国

防軍兵士たちの用語である．さて Mist- をもつ名詞にも人間を表すものが断然多く，29語・54%を占めて Dreck(s)- に次ぐ．そのうち動物から人間に転用されたもの（-biene, -schwein, -tier など）が13語で人間を表す29語のうちの45%を占め，Drecks- の 14 語・36%を比率において，また Scheiß- の 4 語・18%を数と比率においてそれぞれ上回り，Mist- の特色を成している．その一つの -krampe は，本来留めくぎ・かすがいである Krampe が老馬の意味（キュッパーの Krampe[1]）になり，更に能無し（同 Krampe[2]）も表すようになったのを強調したもので，事物名称→動物名称→人間という 3 段階の転用を経ている．この語を加えると事物名称が直接・間接に人間に転用されたものは 5 語ある．一，二の例を挙げれば，-schlittenは「たびたび故障する車・放縦な女性」である．即ちSchlitten が原義の「そり」から乗り物一般に意味を拡大され，更に性行為を暗示して妻や娼婦に対して転義的に使われたことによる．また-bolzen（役に立たぬ家政婦）は，ボルト・くさびのようなスタイルの頑丈な田舎娘を Bolzen と呼んだことに由来する．職業名に由来するもの（-bauer, -kutscher, -lack(e)l の 3 語）もあり，最後の語は無器用・無作法・乱暴な男を表し，多分 Lakai（下僕）に影響されたのだろう，とキュッパーは推測している．Mist- は，人間を表す語彙以外には，まとまった意味論的な場をほとんど形成していない．

擬似接頭辞または接頭辞的規定語としての Lumpen-（18語）に言及している辞典類はないが，前述のようにゲルスバッハ／グラーフが Lumpenzeit を挙げており，ブスマン及びステパノヴァ／フライシャーの規準に照らしても，本稿で扱うに十分な理由がある．人間の蔑称が多いことは第 3 グループの擬似接頭辞群に共通の大きな特色であるが，Lumpen- においては18語中12語（67%）がこれに当たり，Dreck(s)-（60%），Mist-（54%），Scheiß-（30%）を凌駕する．これは Lumpen の派生語または

縁語[30] に Lump（ろくでなし・腕白小僧）があるように，ぼろ布からぼろ服へ，更にそれを着ている人間へと転義が行われたためである．特にこの擬似接頭辞は，群衆・徒党・ならず者の群を表す集合名詞との結合性が高い．

表2　群衆を表す集合名詞との結合性（第3グループ）

擬似接頭辞 ＼ 基礎語	Scheiß-	Dreck(s)-	Mist-	Lumpen-	その他
-bagage	−	−	−	+	−
-bande	+	+	−	+	−
-gesindel	−	+	−	+	−
-pack	−	+	−	+	−
-volk	−	+	+	+	−

表3　群衆を表す集合名詞との結合性（第2グループ）

擬似接頭辞 ＼ 基礎語	Hund(e)-	Laus(e)-	Sau-	Schwein(e)-/ Schweins-	その他
-bagage	−	+	−	−	−
-bande	−	+	+	+	−
-gesindel	+	+	−	−	−
-pack	+	+	−	−	−
-volk	−	−	−	−	−

表2から明らかなように，4個の擬似接頭辞と5個の基礎語による20通りの組合せのうち，11通りが実現している．Lumpen- はこの類の名詞5語すべてと結合し，Dreck(s)- の4語と共に，Scheiß-, Mist- の各1語を大きく上回って，造語上の特性を示している．この点を第2グループと比較してみると，表3にあるように，Lumpen-, Dreck(s)- に匹敵するのは Laus(e)-（4語）だけで，総数でも第3グループの11語に対して8語であり，一歩を譲る．

表2と表3で＋記号が付いている19語のうち，ブロックハウス・ヴァ

ーリッヒは8語，小学館は7語を記載しているが，19世紀初頭のハイネの辞典には全くない．18世紀初頭のカンペの辞典でも Lumpengesindel, -pack, -volk の3語しかない．日常語・俗語が共通語に移行する，周辺から中心への語彙の変動が実感される．キュッパーの記述によれば，これら19語のうち1800年以前に日常語として用いられていたものは僅か5語である．しかも1700年に既に使われていたと見られる Lumpenbagage と Hund(e)gesindel を，カンペは収録していない．語彙そのものだけではなく，辞典編纂者の語の選択基準もまた時代と共に変化するのである．

人間を表す Lumpen- 13語のうち，動物名称の転用が3語(-aas, -hund, -vieh)，事物名称の転用が1語（-stück[31]）ある．また Lumpenmensch には，「いやしい無性格な人間」(m.) 及び「だらしない女」(n.) という同音異義語がある．人間以外では，がらくた（-kram, -zeug）など庶民生活を反映するものが少しある（-geld：はした金，-arbeit, -leben).

キュッパーは Knall-（12語）を，「二重アクセントをもつ合成語の第1シラブルとして，うるさい（laut）聴覚的印象から一部分は直接に，また一部分は視覚的印象を経て，一般的な強調に発展する」と説明している．ここでも人間の名称が圧倒的に多く，6語・50%あり，しかも愚者・狂人を表す語がほとんどである（-depp, -heini, -kaffer[32], -kopf/-kopp, -type の5語．ほかに -protz：不快な威張り屋)．これは銃声・砲声・雷鳴や衝撃音を伴う頭への打撃が，時には精神障害を起こすからである．このように Knall- は，主として「愚鈍」という方向へ意味上の増大効果をもたらし，Scheiß- の「無価値・不快」, Drecks- とMist- の「劣等・不快・不潔」という増大作用と対応する．Knallideeは「馬鹿げた思いつき」だが，一方 -effekt/-hitze は「非常な効果／暑さ」で，ここでは Knall- が単なる強調効果のために用いられている．後者は Affen-/Bomben-/Bullen-/Höllen-/Kanonen-/Mordshitze と同義語である．

Kotz-（9語）は，キュッパーによれば本来「嘔吐」ではなく，「二重アクセントのある呪いや不快を表す語及び強調の形容詞の第1部分として，„Gottes-“をゆがめた（entstellt）」もので，俗語がもつ瀆神の傾向の表れである．Gott(e)s- そのものは，名詞を転用した間投詞（Gottsdonner, -donnerwetter など．名詞を対象とする小論では取り上げない）及び形容詞（gottserbärmlich, -verflucht など）では強調の擬似接頭辞として機能する．さて Kotz- 伴う名詞のうち人間に関するものは -brocken と -propfen の2語しかなく，いずれも「塊」「栓」という事物の隠喩である．逆に事物そのものを示す語が5語あり，そのうちの3語は「安物の，気持が悪くなるようなシガー」である（-balken, -stengel, -stummel）．しかもこれらの基礎語自体に本来「シガー」の意味はなく，俗語としてこの意味が記載されているものは小学館にただ1語（-stengel）で，ブロックハウス・ヴァーリッヒにはない．このように隠語性の強い基礎語に，更に

表4　人間の名称の分布（第3グループ）

	擬似接頭辞 / 基礎語	Scheiß-	Dreck(s)-	Mist-	Lumpen-	その他
A	-bauer	−	+	+	−	−
	-kerl	+	+	+	+	Fetzen- Schiß-
	-kind	+	−	−	−	Piß-
	-mann	+	−	−	−	Schiß-
	-mensch	−	−	+	++	−
	-weib	+	−	+	−	−
B	-aas	−	+	−	+	−
	-amsel	−	+	+	−	−
	-biene	−	−	+	−	Piß-
	-bulle	+	+	−	−	−
	-fink	−	+	+	−	−

	-hammel	+	+	+	−	−
	-hund	+	+	+	+	−
	-käfer	−	+	+	−	−
	-sau	−	+	+	−	−
	-schwein	−	+	+	−	−
	-vieh	−	−	+	+	−
C	-ding	(+)	+(+)	(+)	−	−
	-fetzen	−	+	+	−	−
	-lappen	+	+	−	−	−
	-sack	+	+	−	−	−
	-stück	−	+(+)	+(+)	+	−
	-typ	+	−	+	−	−

「嘔吐」を原義とする擬似接頭辞を付けた語は，俗語・卑語として標準語の語彙の最周辺部に位置する．

3個以下の語しか形成しない5種の擬似接頭辞は，一括して扱うことにする．語数は計10個で，Schißkerl, -mann, -hase(臆病者)；Fetzenkerl, -rausch（深酔い），-schädel（愚か者）； Pißbiene（性的に未成熟な少女），-kind（同上の少年）； Bumskanone（非常に有能な人， 低級なキャバレーなどでもてる男[33]）； Furzidee（下らぬ思いつき）．このように10語中の8語までが人間で，うち2語が動物（Hase, Biene）の隠喩，1語が事物（Kanone）の隠喩，1語が人体の部分名称（Schädel）を人間に拡大した pars pro toto である．

表4のAグループは本来人間を表す語を基礎語とし，Bグループは動物の隠喩，Cグループは物体などの隠喩で，いずれも第3グループに属する擬似接頭辞のうち2種以上と結合する語のみを載せた．（+） はその組合せによる語（例：Scheißding）が辞典などに記載されているが人間の名称

としては用いられないことを示す．従って＋(＋)は人間と物体の双方に用いられるケースを表し，また＋＋はいずれも人間を意味する同音異義語（Lumpenmensch, m./n. 前述）の存在を示す．元来 Dreck と Mist は類義語であるだけに，擬似接頭辞としても競合する場合が多い．即ち両者は23個の基礎語のうち11語と同時に結合し（(＋) 付きの -ding -zeug を除く），両者の＋－が食い違うのは９語に過ぎない．特にＢグループでの競合は12語中７語に見られる(-amsel, -fink, -hammel, -hund, -käfer, -sau, -schwein)．また Scheiß と Schiß. も同語源の類義語であり，後者が擬似接頭辞として結合する３語（-kerl, -mann, -hase）のうちの２語とは前者も結び付く．また基礎語の中で，この種の擬似接頭辞との結合性が最も高い語は -kerl（６個）で，-hund（４個），-mensch, -stück（各３個）がこれに次ぐ．

表５と表６（次ページ）から，先ず人間の名称の数と比率において前者

表５　人間の名称とその由来（第３グループ）

	全語数	人間の名称	動物の隠喩	事物等の隠喩	体の部分の転用	人名の転用	計
Scheiß-	74	22 (30%)	4 (5%)	4(5%)	0	0	8(11%)
Dreck(s)-	65	39 (60%)	14(22%)	5(8%)	5(8%)	4(6%)	28(43%)
Mist-	54	29 (54%)	11(20%)	5(9%)	0	0	16(30%)
Lumpen-	18	12 (67%)	3(17%)	1(6%)	0	0	4(22%)
Knall-	12	6 (50%)	0	1(8%)	1(8%)	0	2(17%)
Kotz-	9	2 (22%)	0	2(22%)	0	0	2(22%)
Schiß-	3	3(100%)	1(33%)	0	0	0	1(33%)
Fetzen-	3	2 (67%)	0	0	1(33%)	0	1(33%)
Piß-	2	2(100%)	1(50%)	0	0	0	1(50%)
Bums-	1	1(100%)	0	1(100%)	0	0	1(100%)
Furz-	1	0	0	0	0	0	0
計	242	118(49%)	34(14%)	19(8%)	7(3%)	4(2%)	64(26%)

表6　人間の名称とその由来（第2グループ）

	全語数	人間の名称	動物の隠喩	事物等の隠喩	体の部分の転用	人名の転用	計
Riesen-	111	16(14%)	8(7%)	2(2%)	0	0	10 (9%)
Lieblings-	50	16(32%)	0	0	0	0	0
Laus(e)-	27	21(78%)	2(7%)	0	0	1(4%)	3(11%)
Sau-	23	4(17%)	0	0	0	0	0
Hunde-/ Hunds-	15	2(13%)	0	0	0	0	0
Elefanten-	15	3(20%)	2(13%)	0	0	0	2(13%)
Schwein(s)-/ Schweine	12	3(25%)	1(8%)	0	0	0	1(8%)
Schafs-	7	6(86%)	1(14%)	0	0	1(14%)	2(29%)
その他	107	0	0	0	0	0	0
計	367	71(19%)	14(4%)	2(0.5%)	0	2(0.5%)	18(5%)

が遙かに優勢であることが分かる（119語・49%対71語・19%）．即ち第3グループの擬似接頭辞をもつ名詞のほぼ半数は人間を表す．

次に動物名称，事物名称，体の部分の名称及び人名を人間に転用したものは，表5で64語・26%(人間名称118語の54%)，表6で18語・5%(人間名称71語の25%）で，この点でも前者が圧倒的に多く，特に Dreck(s)-(28語・全語数の43%，人間名称39語の72%）と Mist-（16語・全語数の30%，人間名称29語の55%)が目立つ．特に Dreck(s)- は上に挙げた4種類の転用のすべてにおいて高い数値を示し，人名の転用(-fritze, -liese, -peter, -suse）は第3グループでは他になく，第2グループでも Lauspeter と Schafsmichel だけである．体の部分名称の転用も，前述の Drecksarsch, -loch, -maul, -schnute, -schnauze, Knallkopf, Fetzenschädel の7語のみで，第2グループにはない．事物等の隠喩は，表4のCに挙げた -stück（3語），-ding, -fetzen, -lappen, -sack, -typ（各2語）に加えて，Scheißfigur, Mistschlitten, -bolzen, Knalltype, Kotzbrocken, -pfropfen, Bumskanone の13種の基礎語をもつ19語が第3グループに属

するのに対して，第2グループにはRiesenmiststück, -typ しかない．なお前者は基礎語Miststück（人間・動物・物体に対する罵りの言葉）自体が擬似接頭辞 Mist- をもち，Riesenbombenrausch, Riesenkanonenrausch と共に，増大・強調の接頭辞を二重に取った語である．

動物の隠喩では，Dreck(s)-（14語・全語数の22％，人間名称の36％）と Mist-（11語・全語数の20％，人間名称の38％）を筆頭に，第3グルー

表7　事物などの名称の分布（第3グループ）

	擬似接頭辞 / 基礎語	Scheiß-	Dreck(s)-	Mist-	Lumpen-	その他
A	-ding	+	(+)+	+	−	−
	-kram	+	+	+	+	Kotz-
	-stück	−	+(+)	+(+)	(+)	−
	-zeug	+	+	+	+(+)	−
B	-arbeit	+	+	+	+	−
	-geld	+	+	−	+	−
	-geschäft	+	+	−	−	−
	-idee	−	−	−	−	Furz- Knall-
	-job	+	−	+	−	−
	-kälte	+	−	+	−	−
	-karren	+	+	−	−	−
	-laden	+	++	++	−	−
	-leben	+	+	+	+	−
	-loch	−	+(+)	+	−	−
	-wetter	+	+	+	−	−
C	-blatt	+	+	++	−	−
	-krieg	+	+	+	−	−
	-stadt	+	+	−	−	−
	-welt	+	+	−	−	−

プが34語（全語数の14％，人間名称の29％）を造り，第2グループの14語(全語数の4％，人間名称の20％)を凌いでいる．第3グループの基礎語は，表4のBで示した -hund（4語），-hammel（3語），-aas, -amsel, -biene, -bulle, -fink, -käfer, -sau, -schwein, -vieh（各2語）及び Scheißfuchs, Drecksbär, -ferkel, -luder, -spatz, -watz, Mistbock, -krampe, -tier, Schißhase の21種類であり，一方第2グループの基礎語は Laus(e)kröte（異形 -krott），Laus(e)-/Schwein(e)hund, Schafsesel, Elefantenkalb, -küken, Riesen(horn)ochse, -kamel, -pferd, -rindvieh, -roß, -schaf, -schwein の13種である．

このように隠喩・転用が大規模且つ多彩に行われることは，第3グループの擬似接頭辞の大きな特色で，日常語の柔軟性・流動性をよく表している．

表7での（＋）記号は事物ではなく人間の名称であることを，また＋＋は共に事物を表す同音異義語があることを，それぞれ示している．Aグループは「物」を表し，Bグループは生活・仕事に（Loch は「見すぼらしい住居・女」），Cグループは公共社会に関連する．19個の基礎語のうち，-kram の分布度が最も高く（5語），-zeug, -arbeit, -leben が各4語，-ding, -laden, -wetter, -blatt, -krieg が各3語を形成する．表4と表7に載せた，第3グループの擬似接頭辞中の2個以上と結合する計44の基礎語は，いずれも日常生活に極めて密着した語であり，増大・強調の接頭辞，とりわけ第3グループとの結合度が高いことは当然と言える．

ここで表2，表4及び表7を総合して，第3グループの主要4擬似接頭辞間の競合度を調べてみよう(表8)．2個以上の擬似接頭辞と結合している基礎語は前述の通り44語あり，Dreck(s)- と Mist- はそのうちの23語を共有する．即ち，-volk（表2）；-bauer, kerl, -amsel, -fink, -ham-

表8　擬似接頭辞間の競合（第3グループ）

	人　　間（基礎語 25）	物体・抽象概念等（基礎語 19）	計（基礎語 44）
Dreck(s)- と Mist-	12	11	23
Scheiß- と Dreck(s)-	7	14	21
Scheiß- と Mist-	5	11	16
Dreck(s)- と Lumpen-	8	5	13
Mist- と Lumpen-	6	5	11
Scheiß- と Lumpen-	3	5	8

mel, -hund, -käfer, -sau, -schwein, -fetzen, -stück（以上表4）; -ding, -kram, -stück, -zeug, -arbeit, -laden, -leben, -loch, -wetter, -blatt, -krieg（以上表7）である．また Scheiß- と Dreck(s)- は21語，Scheiß- と Mist- は16語の基礎語を共有し，類義語としてニュアンスの差を競い合っている．

表8の数値を，第2グループを対象とする表9（次ページ）のそれと比較すれば，第3グループの特徴が浮き彫りにされる．42個の基礎語（*印は人間を表す語）のうち最も多く第2グループの擬似接頭辞と結合するのは -arbeit で，Heiden-, Hunde-, Laus(e)-, Pferd-, Riesen-, Schwein-, Sau- の7種を取る．以下 -dreck, -fraß, -geld, -hunger, -kälte が各4種，-bande*, -bau, -bengel*, -betrieb, -kerl*, -kraft, -kram, -spektakel, -stall が各3種を取る．2種の擬似接頭辞と結合する基礎語は27個ある．即ち -angst, -aufgebot, -baum, -geduld, -gesindel*, -glück, -hitze, -hund*, -idee, -kind*, -konzert, -krach, -lümmel*, -nest, -nickel*, -pack*, -prozeß, -rausch, -schwein[34], -show, -spaß, -stadt, -unternehmen, -veranstaltung, -wetter, -wut, -zahn（スピード）である．人間を表す語と物体・抽象概念等を表す語は9対33で，表8の25対19と全く対照的であり，生物名称から由来する擬似接頭辞は人間よりも遙かに多く物体・抽象概念等の強調の競合関係を作り出している．

表9　擬似接頭辞間の競合（第2グループ）

	人　　間（基礎語9）	物体・抽象概念等（基礎語33）	計（基礎語42）
Laus(e)- と Sau-	5	5	10
Mammut- と Monster-	0	7	7
Laus(e)-と Hunde-/Hunds--	3	3	6
Sau- と Schwein(e)-/Schweins-	2	3	5
Sau- と Hunde-/Hunds-	1	4	5
Riesen- と Heiden-	0	4	4
Laus(e)- と Schwein(e)-/Schweins-	3	1	4

これに対して汚物等を表す語に由来する擬似接頭辞間の競合は，人間と物体・抽象概念等の両グループに亘り，前者がやや多い．このタイプの競合には，同義語または類義語を繰り返して用いることによって強調効果を挙げようという意図が言語使用者たちにある場合と，同一の基礎語をもつ二つ以上の擬似接頭辞付きの語の間に，意味上の（主要・根本などを表す第1グループはこのケースである），それ以上にニュアンスの上の相違を表そうとする場合とが考えられる．

第2グループ中で最も競合度が高く表9の筆頭にある Laus(e)- と Sau- の組は，人間を表す -bande, -bengel, -kerl, -lümmel, -nickel と，それ以外の -arbeit, -geld, -kälte, -nest, -stall の計10語を共有するが，これは表8の第5位にある Mist- と Lumpen- の組の11語にすら及ばない．二つ以上の擬似接頭辞と結合する基礎語の数は42対44で，第3グループにさして引けを取らないとは言え，第2グループに属する擬似接頭辞が26種，造り出した語が367語で，第3グループの11種・242語を大幅に上回ることを考えに入れると，この種の基礎語の数は第3グループの場合よりも実質的にはかなり低いと言ってよい．それ以上に異なるのは，表7の Dreck(s)- と Mist-, Scheß- と Dreck(s)-, -Scheiß- と Mist-, Dreck(s)- と Lumpen- などのように，集中的に競合関係を造るペアーが，表8には欠けて

いるという点である．第2グループに属し互いに類義語である擬似接頭辞の組のうち，現実に競合を起こしているのは，Sau- と Schwein(e)-/Schweins-（共通の基礎語は -arbeit, -bande, -glück, -kerl, -stall の5個）以外には Mammut- と Elefanten-（-baum）だけで，Kuh- と Bulle-, Katzen- と Kater-, Pferd- と Esel-, Schafs- と Bock- などの組は，競合する語を全く造り出していない．

増大・強調の各擬似接頭辞及び各グループの特徴は，次稿以下において，(4)科学・技術用語に由来するもの，(5)殺人・地獄・悪魔・死（者）などを表す語に由来するもの，(6)その他，の3グループについて論述することによって一層際立ってくることであろう[35]．（未完）

注

1 本稿は，関西大学「文学論集」創立百周記念号掲載論文の続篇である．このテーマの研究史と，それに対する筆者の批判については，上記の小論を参照されたい．

2 Hadumod Bußmann, *Lexikon der Sprachwissenschaft,* Stuttgart 1983.

3 筆者の前掲論文489ページの最後の2行にある「擬似接頭辞」は「擬似接尾辞」の誤植である．

4 Wolfgang Fleischer, *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache,* Tübingen 1969.

5 F. Daneš, *The Relation of Centre and Periphery as a Language Universal,* In: *Travaux linguistiques de Prague,* 1966, S. 11.

6 Fleischer, a. a. O. S. 66.

7 ders. 1983[5] S. 76. この引用文は改訂第5版（1983）で追加されたもので，それ以前の版のこの章には，„Präfixoid“ という術語は見られない．

8 Johannes Erben, *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre,* Berlin 1975.

9 ibid. S. 79.

10 Hans Wellmann, *Deutsche Wortbildung. Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache. Zweiter Hauptteil, Das Substantiv,* Düsseldorf 1975.

11 Bernhard Gersbach/Rainer Graf, *Wortbildung in gesprochener Sprache*

Bd. 1, Substantiv, Tübingen 1984, *Bd. 2, Verb/Adjektiv,* 1985.

12 Arno Ruoff, *Häufigkeitswörterbuch gesprochener Sprache,* Tübingen 1981.

13 日本独文学会編「ドイツ文学」第78号（1987年３月）掲載の，筆者によるこの著書の書評を参照されたい．

14 Gersbach / Graf, S. 163-165.

15 Marija D. Stepanova / Wolfgang Fleischer, *Grundzüge der deutschen Wortbildung,* Leipzig 1975.

16 ibid., S. 43.

17 ibid., S. 63, miß-, un-, ur- をもつ語の例は示されていない．

18 ibid., S. 143.

19 Prachtknopf（-knopp）（優れた特性をもつ人）<Knopf[4]（キュッパー：不快な独自性で目立つ人，変人）．

20 Prachtmannsbild（たくましい体格で筋肉質の男）<Mannsbild（1. 男…中高ドイツ語の時代から．2. 力強い男）．

21 'Prachtstück は「非常に美しく価値のある物」で，一方 'Pracht'stück は「優れた特性をもつ人，堂々とした人（皮肉の場合もある）」（共に1900ff.）である．同様にキュッパーは 'Prachtmensch（儀典長，1920ff.）と 'Pract'mensch（優れた特性をもつ人，1850ff.）とを，単一アクセントと二重アクセントで区別している．

22 キュッパーの Kerl[4] は「大きな物」を指し，ein Kerl von Baum / Kartoffel のように用いる（19世紀より）．ここでは物体が擬人化されている．

23 キュッパーは supermaximale Wunderschabe の形で記載し，Schabe=Motte=Mädchen と説明している．

24 ほかに人体の部分から由来する Scheißfotze（女）<Fotze=Vagina がある．

25 Scheiß-Bund=Bundeswehr, Scheißfriede：第一次大戦後の押し付けられた平和，Scheiß-Barras（兵役）<frz. baraques（バラック）

26 Scheißmaloche（難しい勤務）<jidd. melocho=Arbeit

27 Scheißmampfe（まずい飯）<mampfen <mupfeln od. mümpfeln <Mundvoll

28 Drecksloch には「汚い家・村」のほかに「娼婦」の意味がある．Loch[17]（キュッパー）=Vagina

29 Wisch は本来の「トイレット・ペーパー」から「いかがわしい文書（1500年以来）」になった．

30 Lumpen と Lump の関係については，ドゥーデンとクルーゲの両語源辞典の記述が一致していない．即ちドゥーデンは，この２語はいずれも spätmhd. lumpe（ぼろ，弱変化名詞）に逆上り，語形の短縮によって Lump が生じ，一方，斜格の -n を17世紀に主格が取って Lumpen の語形ができた，としている

が，クルーゲは17世紀に Lump が Lumpen から分かれたと記述している．

31 動物を zehn Stück Vieh / Wild と数えることから，Stück が人間にも転用された．くつろいだ調子の小言に使い，また女性，特に娼婦の蔑称となるほか，パン切れ・行為・金を表すこともある．

32 Knallkaffer（大馬鹿）＜Kaffer（村人，愚かな農夫）＜jidd. kapher（農夫）

33 Bums[6]：低級なキャバレー，バーなど，Bumr[9]：力，エネルギー（いずれもキュッパー）

34 Affen-/Riesenschwein はいずれも「大幸運」であり，-schwein は第３グループと結合したときのような人間の蔑称ではない．第２，第３グループの相違がこの基礎語の多義性と結合し，相乗効果を挙げている．

35 ステパノヴァ／フライシャーの基準３）（小論 140ページ）にある「連続的な造語」については，筆者は見解を異にする．現在の時点では唯１語しか造っていない造語要素であっても，意味論的・音韻論的（二重アクセント）に見て，「連続的な造語」の潜在力があると見られるものは，記述の対象として取り上げた．

Deutsche Substantive mit Präfixoiden zur Steigerung und Verstärkung (2)

Yuji Watanabe

Präfixoide bilden eine breite, fließende Übergangszone von Bestimmungswörtern in Zusammensetzungen zu Präfixen. Nach Stepanowa / Fleischer können folgende Kriterien für die Zuordnung eines Wortbildungselements zum „Halbaffix" (auch: Affixoid oder relatives Affix) genannt werden:

1. die obligatorische formale Übereinstimmung eines Halbaffixes mit dem Stamm (seltener: der Wortform) eines frei funktionierenden Wortes;
2. die etymologische Verbindung des Halbaffixes mit dem Stamm eines frei funktionierenden Wortes, was eine zufällige lautliche Übereinstimmung mit einem nichtverwandten Stamm ausschließt;
3. die mehr oder weniger ausgeprägte Serienbildung, d. h. die Verwendung eines Halbaffixes nicht in nur einem, sondern in mehreren (oder sehr vielen) Wörtern;
4. die semantische Ähnlichkeit eines Halbaffixes mit einem frei funktionierenden Wort bei einem höheren oder geringeren Grad semantischer Umdeutung. (M. D. Stepanowa / W. Fleischer: Grundzüge der deutschen Wortbildung, Leipzig 1985)

Präfixoide zur Steigerung und Verstärkung, die eigentlich Substantive sind, gliedern sich in zwei Gruppen: d. h. die zur Hervorhebung vom Hauptsächlichen, Gründlichen, Höchsten usw. (also: Untergruppe 1 in unserer Liste 1) und die mit starken emotionalen Beiwerten (also: Untergruppe 2 bis 6). Die meisten Bildungen mit letzteren Präfixoiden werden vorwiegend in bildlicher, affektbetonter Sprache, in umgangssprachlich-saloppen Sprachschichten gebraucht.

Die Forschung über Präfixoide und Suffixoide bleibt immer noch im Anfangsstadium: Selbst Stepanowa / Fleischer, die viel mehr Beispiele für Präfixoide zur Steigerung und Verstärkung angeführt haben als jeder andere Forscher, zeigen nur 23 davon, und W. Henzen (1965), W. Fleischer (1969), J. Erben (1975), H. Wellmann (1975), B. Gersbach / R. Graf (1984) und Stepanowa / Fleischer (1985) haben insgesamt nur noch 26 Präfixoide dieser Art genannt——eine erstaunlich geringe Anzahl!

Bei Präfixoiden überhaupt handelt es sich um das sprachwissenschaftlich wichtige und interessante Problem von Zentrum und Peripherie sprachlicher Kategorien bzw. Einheiten, wie es von der Prager Schule erörtert worden ist, und zwar im doppelten Sinne: erstens, wie gesagt, der Übergang von Bestimmungswörtern zu Präfixoiden, dann weiter zu Präfixen, zweitens, der von der Umgangs- und, wenn auch teilweise, von der Fachsprache zur Gemeinsprache.

Von diesem Gesichtspunkt aus haben wir sowohl aus Wörterbüchern (z. B.: Brockhaus-Wahrig, Duden, Küpper, Mackensen, Wahrig, Shogaku-Kan und——zur Untersuchung des geschichtlichen Wandels——Campe (1807-1811) und Heine (1905-1906) als auch aus Zeitschriften (vor allem „der Spiegel" und „der Stern") 1557 Substantive mit 82 Arten von Präfixoiden zur Steigerung und Verstärkung gesammelt, die dann in sechs Untergruppen gegliedert worden sind: Die erste besteht aus 16 Präfixoiden fürs Hauptsächliche usw. (z. B.: Haupt-, Grund-, Spitzen-, Traum-), die 716 Wörter gebildet haben. Die zweite enthält 26 Präfixoide, die von Tiernamen in weitestem Sinne stammen (z. B.: Riesen-, Mammut-, Laus(e)-, Affen-) und 367 Wörter geprägt haben. Die dritte Untergruppe mit 11 Präfixoiden, die etwas Unangenehmes bezeichnen, (z. B.: Scheiß-, Drecks-, Mist-, Lumpen-) umfaßt 242 Wörter. Zur vierten gehören 8 Präfixoide, die eigentlich wissenschaftliche oder technische Ausdrücke sind (Bomben-, Quadrat-, Atom-, Schwerpunkt- u. a.) und 78 Substantive produziert haben. Die fünfte besteht aus 7 Präfixoiden wie Mords-, Höllen-, Teufels-,

Pest- usw., womit 74 Wörter entstanden sind. Die anderen 14 Präfixoide (Pfunds-, Blut-, Allerwelts-, Marathon- usw.) sind als die sechste Untergruppe zusammengefaßt.

Die dritte Untergruppe wird in diesem Aufsatz behandelt, der einen Teil unsrer systematischen Forschung über die Wortbildung mit Affixoiden bildet. (Fortsetzung folgt)